

2017. 4. 23. 復活節第2主日礼拝説教

使徒言行録講解説教

聖書：Ap g. 1：1-14,

『父が約束されたもの』

今日から使徒言行録にご一緒に聞いていきます。

ルカ福音書を書いたルカ、という人は、イエス・キリストの歩みを記した福音書を書き、その続編である、使徒言行録を書きました。福音書の続編を書いたのは、四つある福音書の中で、ルカだけです。ルカは、イエス・キリストの十字架と復活、というところまで福音書としては一つの区切りをつけたのですが、どうしてもそれで終わりにはしたくなかった。復活の主と出会い、十字架と復活の福音を受け取った者たちが、その後どのように歩んだのか、キリスト教会はどのように生まれ、どのようにその歩みは進められていったのか。ルカは福音書の続編を書くことが必要であると思い、準備を重ね、この使徒言行録を書いたのです。人によっては、ルカはさらに、使徒言行録の続編も書こうとしていたのではないかと想像する人もいます。が、残念ながら、今に至るまで、使徒言行録の続編はどこからも出てきてはいません。しかし、ルカが、この使徒言行録を書き残してくれたことの意義は測り難く、もし使徒言行録がなければ、わたしたちは最初期の教会のことは、何もわからない。主イエスの復活後、どうなってキリスト教会が生まれたのか、というようなことは一切わからないまま。パウロの手紙などで、はるかに想像するだけです。しかし、使徒言行録を読むことは、単に、最初期の教会の様子を知る、というようなことにとどまりません。十字架と復活の福音によって生かされていることを知った人たちが、事実どのように生かされ、生き、歩んでいったか、聖霊の働きとはどのようなものなのか、そこで生まれた教会は、神の力にどう導かれ、進展していったのか、今を生きるわたしたちに直結する事柄が、ここには描かれているのです。

さて。ルカは使徒言行録も、ルカ福音書と同様、テオフィロ様宛に書き出します。テオフィロがどんな人だったのか、何もわかりません。実在の人物かどうかともわかりません。テオフィロというのは神の友、という意味ですが、ひょっとしたらルカは、誰でもない、神を信じるキリスト者、友に向けて、この文書を書いたのではないかと。ルカ自身はお医者さんで、おそらくはギリシャ系のユダヤ人からいけば外国人。相当に教

養のある人だった推測されます。

ルカは使徒言行録冒頭で、自分は先にルカ福音書という第1巻で書いたことを短く要約したあと、復活後のことを書き始めます。3節以降です。

復活された主イエスは四十日にわたって地上での日々をすごされ、弟子たちに教え、食事を共にしたり、交わりを持たれ、「エルサレムから離れないで、父が約束されたものを待ちなさい」といわれました。父とは父なる神のことで、約束されたものとは、聖霊が注がれることであり、弟子たちに聖霊による洗礼が授けられるということでした。

わたしはここを読むと、弟子たちはいったいどんな思いで、主イエスと食事をしたのか、と思います。全員主イエスを裏切った弟子たちです。全員土壇場で逃げ出した弟子たちです。普通なら、もう二度と主イエスの前に顔を出すことなど恥ずかしくできない者たちです。ところが裏切られ殺された主イエス・キリストは、復活して、また弟子たちとご自分の方からお会いになって、弟子たちを受け入れる。

弟子たちは、復活という出来事にももちろん驚いたでしょうが、さらに、復活した主イエスが自分たちのところに来てくださり、自分たちを弟子として変わらず受け入れてくださったことにも驚いたと思います。そして自分たちの誠実さとか、信念とか、忠誠心とかで主イエスと自分の関係があるのではなく、ただキリストのまことゆえにこの関係が与えられているのだ、ということを知り始めてまともに受け止めたのではないかと、思います。

主イエスは父からの約束のものを待ちなさい、といわれる。聖霊です。これもまだ全然ピンと来ていない。ピンとどころか、何もよくわかっていない。

そういう中で弟子たちが言い出したことはこういうことでした。

「主よ、イスラエルのために、あなたがまことの支配者となって真の国を復興なさるのはいつですか。」と尋ねたのです。弟子たちの頭の中には、イスラエルが例えばダビデという偉大な王さまの時のように、栄耀栄華を極め、(政治的にも経済的にも、軍事的にも)強大な国になって、世界をリードするそういうイメージがあったのでしょう。終末に向かう始まりはいつなのでしょう、という素朴な疑問もあったでしょう。彼らは、自分たちが勝手に思い描く、理想の王国、イスラエルの優越、そして終末、そういうものをキリストに託そうとしていた。

まったく人間はいつでも、自分のイメージにとらわれ、それを神に勝手に期待するものなのです。他人事ではなく、うんざりします。

それに対して主イエスははっきりとこういわれた。「父がご自分の権威をもってお定

めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

ここで主イエスが言われていることは二つ。一つは、あなた方が勝手に自分のイメージを膨らませて、神が定める終末の時は、いつかというようなことは、あなたがたの知るところではなく、神がお決めになり、神が定めるときだ、ということ。そして二つは、聖霊が降るとあなた方は力を受けて、イエス・キリストの復活の証人として、地の果てまで、全世界で福音の伝道をするのだ、ということです。

ということは、これから神が定める終わりの時まで、それはいつ来るのか私たちにわからないけれど、キリストの弟子たちは十字架と復活の主の証人として、福音を宣べ伝え続けていくのだ、ということなのです。

「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」主イエスは昇天されたのです。

せっかく復活してくださったのに、そして弟子たちからすれば、裏切り見棄てたにもかかわらず、その自分たちを受け入れ、共に歩んでくださっているのに、なぜ、またいなくなってしまうのか、なぜ地上からいなくなってしまうのか、そう思ったのではないのでしょうか。キリストの誕生も、わたしたちにとっては全く不思議な出来事です。そして地上に来られた主イエスがまた神の御許に帰っていかれる昇天も、わたしたちの理解を超えています。

しかし、昇天ということでわたしたちに示されるのは、イエス・キリストのこの地上での使命はすべて果たされ、神の御許に帰られたのだということです。そして、キリストの業はそれで終わりなのではない、ということ。

今度は、キリストの復活に出会った一人一人が聖霊の力を受けて、キリストの証人として、福音を宣べ伝えていく、福音はそれを信じて生きる者によって継承されていく、そういう時を迎えていくのだ、とキリストは最後に語られた。「わたしは地上で神の言葉を語り、歩んだ。今度はあなた方が、聖霊の力の中で、歩みだし、わたしの証人となって、わたしの働きを継承していくのだ」、ということです。

イエス・キリストの地上での歩みと働きの時、「イエス・キリストの時」から、弟子たちをはじめ、キリストを信じた者たち一人一人が用いられて教会が形成され、福音を証し宣べ伝えていくとき、「教会の時」が始まった、ということです。

「教会の時」という言葉が聖書に出てくるわけではありません。しかしルカが、福音

書と、使徒言行録という2巻本を要約すれば、福音書において「イエス・キリストの時」を、使徒言行録において「教会の時」の始まりを著そうとした、と言えるのです。復活の主は四十日を経て、昇天された。それはわたしたちが礼拝の中で告白する使徒信条でいう、天に昇り、神の右に座したのです。それはキリストの本来の場所でもあります。キリストが天に帰られたことは、寂しいことでも、心許ないことでもない。キリストの本来の立ち位置と言ってもいい場所です。キリストは聖霊の働きの中で、これまでとは違った仕方で共にいてくださる。そしてキリストの弟子たちが福音を宣べ伝えていくその中で共に働いてくださる。

以来、2000年にわたって教会の時は続いています。まさに地の果てまで、福音を宣べ伝えられ、キリストの証人としての歩みはこの歴史の中で、途切れることなく継続されてきた。

わたしたちは今日の聖書箇所から、2つのことを受け取るのです。

ひとつは、わたしたちはキリスト昇天後の時を生きているということです。したがって、キリストはわたしたちの目には見えず、この地上にはかつての日々のようにはおられない。しかしそれはこの世界には神は不在だ、というようなことでは全くない。キリストは聖霊の働きの中で、わたしたちと共に歩んでくださる。それをこの使徒言行録でわたしたちは聞いていく。

もう一つ。キリスト昇天後、福音に出会った弟子たちは、どうしたのか、ということ。十字架と復活の福音はわたしたちに与えられた。その福音をわたしたちは弟子たちと共に聞く。しかし聞いて終わりなのか。自分の中で受け取ってそれで終了なのか。キリストは、わたしたちを、わたしたちという場合、わたしという意味と、わたしたち教会という意味が重ねられています。福音を証しし、宣べ伝えるという教会の時の中にわたしたちも生きている、ということ。一人一人に神への応答が求められ、教会の応答が求められている。ルカは、そのことを書き記したいと願った。使徒言行録に聞いていきましょう。

Data: 復活節第2主日礼拝式説教

讃美: 前321、後338

新生教会礼拝堂